



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	断酒会にたどりついたあなたへ (2)
Author(s)	眞崎, 睦子
Citation	かがり火, 162, 8-8
Issue Date	2011-03-01
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/62151
Type	article
File Information	kagaribi-2.pdf



前回のエッセイに多くのお声をお寄せいただき、各地で『かがり火』を囲むお一人おひとりに改めて思いを馳せることとなりました。ありがとうございます。今日は、前回も触れた授業、「社会問題としての飲酒」の講義室を少しだけご覧いただきます。

「何学部どんな授業？」

所属学部や学年を問わない主題別科目「社会の認識」の中の授業として、毎回設定したテーマのもとに15週に渡り開講しています。各回最初の3分程度の発表の時間には、例えば、医学部生は飲酒関連の医学的な知識、法学部生は飲酒をめぐる他国の法律、などのように、自身の関心に沿った情報と、それに対する個々の分析を提供してくれます。その日のテーマに合わせて発表をする学生もいます。留学生が、出身国の飲酒実態について報告してくれることもありますよ。キーワードはただ一つ、講義題目でもある「社会問題としての飲酒」です。これらをもとに、私たちが暮らす日本社会における飲酒の負の側面について見つめ直し、個々の視点で分析を加えていくといった授業です。

「そこで断酒会員が何をしているの？」

飲酒の負の側面を知るための生きた教科書として学外のゲストスピーカーのみなさまにご協力いただくことがあります。札幌連合断酒会(以下、札連)のみなさまには2005年度の開講以来、ご協力いただいています。

道外から来たばかりのよそ者の提案に丁寧かつ慎重に対応して下さったのは当時の札連会長、表(おもて)さんでした。それまで、多少、各地の自助グループにご縁がありましたが、どのような方が授業に来てくださるのか、そして何より、受講者はゲストの話をどう受けとめるのか、実をいうと大きな不安がありました。しかし、アルコール依存症についてわかりやすくお話しくださった表さんと、ご自身の体験を文字通り掘り起こすように明らかにしてくださったHさんの

断酒エッセイ



断酒会にたどりついたあなたへ(2)

北海道大学大学院 准教授(教育学)

眞崎 睦子

よくよく伺ってみると、「四人のほうが心強い」とのこと、配慮不足を恥じたものです。四通りの断酒会までの道のりは、「断酒会に集う人々は一様ではない」という何よりの証明になり、翌年以降も複数の方に来ていただくことになりました。2007年度は受講者数が120名までふくらみ、階段教室での授業となりました。受講者が多くなると、本音で語ることが容易になるのでしょうか。これまで出なかったきびしい言葉が目立ちました。その代表的なものは、「アルコール

お二人は、受講者約60名の多くが「アルコール依存症」に対してもつていたイメージを、静かに破壊してくださいました。そして2006年度、表さんがご紹介くださったのが、廊下のゴミを拾いながら講義室まで歩まれた現在の札連会長、工藤さんです(私の研究室にご案内しなくてよかった)。この年、思いきって家族会にもご協力をお願いしてみました。工藤さん(奥様)を含む四名がいらしてくださいました。「え、四名も?二名くらいで結構ですが」と申し上げたのですが、

依存症は甘えではなく病気だと学び、理解しようとしたが、家族会のみなさんご苦勞を伺うと、やはり単なる甘えとは思えない」という意見。具体的には、「工藤さんの奥さんのお話を伺った後、工藤さんご本人のお話を伺うと、あまりにも温度差があり、腹が立つ」など(工藤さん、ごめんなさい)。実は私、この学生の声をうれしく受けとめました。アルコール依存症の問題の渦中には、必ずそれを支えようとする家族がいて、支える気持が強いほど、苦しみも大きい、

そこに気付いてもらったことを実感した瞬間でした。もう一つ、忘れることができない受講者のコメントを紹介しましょう。家族会Nさんの体験談(お子さんが依存症)に対して、「故郷の母を思い出した」というもの。家族会のみなさまのことを、自身の「お母さん」と同じ、子を思う親の一人なのだと気付いてくれたのです。そして、階段教室でお話くださった「お母さん」を取り囲み、見下ろすのは失礼だし、お気の毒だと直言してくれた学生もいました。これについては他によい講義室の空きがなく、札連のみなさまにも事前に階段教室であることをお知らせしていたのですが、私の授業に来てくださった「お客様」をこのように大切に迎えてくれた彼の気持ちがうれしくて、うれしくて。このように授業をめぐるエピソードはつきませんが、追って紹介していきたいと思えます。

ありがたいのは、札連のみなさまが学生たちの批判的なコメントも「これも社会の声」と、ありのままに受けとめてくださることです。「いいことはかりお知らせしては逆に失礼になる」という私の考えをご理解くださることに感謝しています。

次号では、「断酒会の中で一番えらいのは誰か」ということについて書かせていただく予定です。「断酒会には便宜上、役職が設けられているけど、えらい、えらくない、なんてありません」というお叱りの声が聴こえてきそうー「断酒会で一番大切にしていた人」と言いかえましょう。ではまた「かがり火」のこのページでお目にかかります。